



九州・地域活性のキーパーソン

福岡県大木町 おおき循環センターくるるん  
大木町環境課 係長 境公雄さん農業がさかんな町で生ゴミを活かす！  
循環システムの確立を。

大木町環境課 係長 境公雄

51歳。大木町役場に勤務。行政と住民のパートナーシップによるまちづくりのため力を尽くす。また、全国各地で大木町の循環のまちづくりのしくみを解説するなど、講演活動などにも力を入れている。

「おおき循環センターくるるん」は、町内から発生する一般廃棄物を町の資源として活かす、循環のまちづくりの拠点として平成18年11月にオープン。町民との協働で町内から発生する生ごみやし尿・浄化槽汚泥などをエネルギーや有機肥料として地域の中で循環活用している。大木町は2008年3月「もったいない宣言」を公表。10年以内にゴミ処理をやめることを目標とした取り組みを行う。

その取り組みについて、境さんに伺った。

## 「くるるん」という名は？

本当は町民に公募して決めなかったんですけど時間がなかったんですね、いくつか案をだして子供たちも含めて投票で決めました。で、くるるんというのが一番多かったですね。

くるるんというのは、循環の環ですよね。とにかく、すべてまわってまわりますよね。基本的には昔から、自然界にはもともとゴミがないわけで、すべてぐるぐる回ってね、有用なものとして活用されていたんですけども、人間社会の中で一方通行型で、ゴミを燃やしたりとか、埋め立てたりとか、そういうようなことをやり始めて、自然界にとって変なところが出てきた。

基本的には、お金とか、人とかそういうものも回していくというのが、それが循環の考え方ですから、人も金も好循環を地域の中で作り出していくという、そういう意味をこめたのがくるるんだったんです。この名前、私たちがよかったなと思ってるんですけどね。



と通る水路。このすぐ前も掘割なんですけども、集落内はですね、町内を掘割が縦横にはりめぐってですね、総延長で270キロくらいになりますね町内だけで。そういう非常に自然が豊かな環境の中で、掘割の汚れとか、そういうものが顕著になってきたんです。そこで昔のような姿を取り戻したい。

もともと農村地帯では生ゴミはきちんと堆肥にして、田んぼに土として還していたんですけどもそういうものもすべてゴミとして無理やり燃やすというようなことをやったんで、そういうのはおかしいだろうという問題意識が強くてできてまして。そういうことで、平成2～3年くらいから、いろいろゴミに対する取り組みを進めてきた経過はあるんですね。

具体的に言えば、生ゴミを、資源化したり、缶とかビン、不燃物の分別も、大木町はこの辺では一番早く、平成7年から全域で始めてますしね。そういうような経過があって、平成12年に新エネルギービジョンを作って、特に生ゴミが家庭の処理だけでは限界があるんで、町全体としても取り組む必要があるだろうということになりました。で、どういった方法が一番いいだろうということでメタン発酵による資源化ということで、新エネルギービジョンの計画の中で、調査し方向性を示しました。

大木町は非常に農業が盛んな町でまちづくりの方向性としてこういう環境のことを考えた、持続可能なまちづくりを目指すということになったんです。で、いろんな意味で自立した持続可能なまちづくりをめざすというビジョンがどうしても必要となってきて、平成12年に大木町の循環まちづくりビジョンを作りまして、基本的にこのビジョンに基づいて、今のところ環境政策を中心にまちづくりを進めてるという状況かなと思っております。



## ビジョンの「4つの柱」

一つは、できるだけ無駄をなくしてゴミになっているものは徹底的に資源利用していこうというような考えです。そのためには、特にゴミ処理とかはですね、税金で一方向的に処理をするという、そういうような流れが定着していたんですけども、やっぱりそれは違うだろうと。それぞれゴミを出す住民も含めて、きちんと役割分担をしていく必要がある。お金をかけて処理をするという方向性は、財政的にも限界がありまして、非常に無駄も多いし、きちんと資源化しなければならない。

それで、2つ目が、その無駄を省くために、それぞれ街の中のセクターが責任を果たすという、そういう仕組みを作ったんですね。それは宣伝しただけではそういう風にはならないんで、そうなると仕組みをつくる、社会システムを作ることが重要だろうということです。

3つ目なんですけど、そうするとやっぱり、地域としては、農業の町なので農の豊かさを地域で分かち合うという地産地消をもっともっと推進する必要があります。大木町は農業の町ですけど、実際農業従事者はですね、農家は兼業農家も入れて3分の1くらいなんです。3分の2は非農家で、何らかの形で食べ物を買ってます。その時に地域で採れた安全で新鮮なものが手に入るような仕組みができてくるかっていうと、できていないんですね。スーパーに行って、例えば大木町ではきのこの生産は九州一なんですけども、スーパーに行っても、例えば長野産のきのこを買ったりとかね、お米はたくさんできますけども、新潟産のお米を買ったりとかね、結構そういうような形になって



(資料提供：大木町)

## 大木町が「循環の町」づくりに取り組んだ理由

もともと、先々代の町長が非常に環境に関心があって、特に大木町は掘割が非常に多いんですね。町の14%を掘割が占める。掘割というのは、柳川とか、川くだりで有名なやつですね。町内をずっ

ると。やっぱり地域で安全で新鮮なものが取れるから、そういうものを地域の人が受け取れるような、そういうような仕組みを作ることが、地域の豊かさにつながるだろうと考えたわけです。エネルギーに関しても、今はもう、例えば電気とかいくら使っても何の問題意識もなく使えるし。石油とかガソリンとか灯油とかも不自由なく使えるんだけど、それがずっと続くということではないだろうということなんです。そういう意味で、やっぱり地域で、できるだけエネルギーの自給も考えておく必要があるということで、食と同時に小規模エネルギーをできるだけ地域で自給していこうと思っています。これは、考え方としては、まず、きちんと省エネをやる、エネルギーの無駄を省いて、再生可能なエネルギーを普及していくというような取り組みを進めていく必要があるということです。

4番目がですね、地域の昔からの文化をもう一回見直すということが、今まちづくりにかかせないと。どうしても、大量消費社会になってその地域が崩壊してきたという、そういうところがあるんですね。昔はたとえば地域の人たちが、一生懸命協力して、農作業にしても、いろんな村のことにしても一緒に協力してやってきたんだけど、大量消費社会の中でモノがあふれ、お金の主体の社会になる中で、そういうのがどんどん崩れてきていると思います。昔に帰るといっていいんだけど、昔から伝わる生活の暮らしの知恵とかですね、文化とかそういうものをきちんと踏襲するという、これからのまちづくりにとって欠かせないそういうものが大木町なりの持続可能なまちづくりの柱だろうという考え方ができあがり、それがベースとなっている事業を進めてきたということになりますね。

## 行政が一方向的にやりましょう と言ってもダメ

基本的には積み重ねなんでしょうけども。住民との協働、一緒にやっていくということは、なんか行政が一方向的にね、都合ができたから、これを一緒にやりましょうと突然言っても、それがすぐ住民に浸透するということはありません。

例えば、こういう循環のまちづくりビジョンについても、町民委員会を作って、その中で、一緒に決めてきたことなんです。ですから最初の段階から、住民とおなじ目線で話をしながら進めていくという過程を経ることができればということで、もちろんすべての住民と、すべて意思疎通ができるなんてありえないわけですから、その中でできるだけ多くの住民との関わりを、最初の段階では小さな輪でも、それを町の中に広げていくという経過が必要なんです。

もうひとつ基本的に垣根を作ってるのは行政なんです。今までの行政のあり方というのは、行政っていうのは、権限はあるし、情報も持っているし、お金も持っているからですね。意外と今まで前例を踏襲して、新たなことをやりたがらないとか、特にその町民の中に、自ら出て行って、一緒にやろうというような仕組みを作りたがらない。意外とそういう意識は強いんですよね。

逆に町民はですね、自分はまちづくりに関わりたいとかそういう意識はどちらかというと強い人が多いんですよね。だから、行政が思い切って垣根をとっばらって、一緒にやっというスタンスでやれば、かなり住民との、いろんな小さなところまで、できるんじゃないかなという風に思ってるんですけども。

ただ、行政というのはまちづくりのプロですから、その時にやっぱりきちんと、それぞれの地域にあったビジョンを町民にきちんと示す。その都度その都度示していくということは、これは当然必要なことなんです。ただ、そういうプロとしての役割を持って、同じ土俵の中で、町民と積み上げていくという経過を経ないと、委員会を作って住民の声を反映するみたいなことをやりますけどあれは結構都合のいい人間を集めて、その中で決まったということで、住民の合意を得たみたいな手続きだけをやるようなことも結構あるんですね。それは逆効果でしかないと思うんですよ。そこが非常に難しいところで、そこら辺の手腕が、今、行政職員に問われているだろうと思いますね。

行政にとってですね、もう、それしかないんですよ、はっきり言ってね。

今までのように、箱モノとか、そういう行政でのしげるかという、もうそういう状況ではないということは明らかですからね。

だからそういう意識を持ってやっていく必要があるのかなと思ってるんですけど。ただ大木町はそういう意識を持った職員が結構割合としては高いんじゃないかなと思ってますけど。



（資料提供：大木町）

## 住民との「距離」 大木町の人口が幸いている

14500人くらいなんですけどね、人口がね。それくらいの人口というのは、結構住民との距離が近いんです。役場の職員の中でも、住民団体に個人として入って、まさしく事務局を担ったりとかいろんな事務を担ったりしてる職員も結構多いんですよ。そういう形で他の町民との関わりを持つことで、やっぱり事務能力高いですね、情報も教えてるんで、結構頼りになるんですよ。だからそういう関係も築きながら仕事に活かしていくことをやってる職員が割合としては高いんじゃないかなと思いますよね。

## もともと住民もまちづくりへの 関わりを持っていた！

例えば、ひしのみ国際交流センターというのが大木町にはあるんですね。これは、財団法人なんですけども、地域の個人とか、事業所とかが、お金を出し合って人材育成しようという目的で、平成になる前からやってるんですよ。これも町民と行政と一緒にやってる事業なんですけど、そういう一緒にやってきたことが昔からあるんですね。町民もそういう意味では、行政への関わりというのは、昔からかなり持ってますね。特に、大木町住民団体の活動も盛んなんですよ。

例えば、環境に関する団体とか、福祉に関する団体とか。

それともう一つ大きいのはきのこの生産が九州で実際に一番多いんですけども、それをやっているのが、農業生産法人が生産を担ってですね、3〜4人で会社を作ってやってるんです。彼らも結構自分たちの仕事だけじゃなくて、まちづくりに積極的に参加するというようなスタンスで、やってますんで。結構もともと町民が、まちづくりに関わりを昔から持ってきているということもあるんです。

だから、町民も、乗りやすかったんじゃないかと思います。

## 若い人も比較的多い！

きのこの生産法人でもですね、20代だけで作った法人とかもあるんですよ。若い人だけで集まって、やろうというようなところもあるし、女性だけの法人とかもありますし、そういう若い人たちが結構多いでしょうね。周りに比べたら。

## 大木町の環境意識

掘割に対する関心というのは、特に年配の人たちは高いですよ、昔はやっぱりきれいだっただすね。生活の一部で、農業用水としても非常に貴重でしたし、生活用水としても、かなり昔は、飲み水とか、洗い水とか全部、掘割の水に頼ってましたからね。だから、そういう非常にきれいな掘割の姿、生活に密着した掘割の姿を年配の方々は知ってますからね。

そういう人たちが、今の、例えば汚れた水とかゴミが浮かんでるとか、そういうのを見るとやっぱりね、元のきれいな掘割の水に戻したいと思うところはあるでしょうね、当然。

水ってというのは、非常に暮らしの質を高めるといふか、水辺というのは非常にいいですよ。

ですから掘割があったからこそ、大木町の住民の環境意識が高かったということもあるのかもしれないですね。

## 10年後にはゴミゼロを目指す！

成果というか、それは今、取り組みを進めてる段階で、具体的には、ここにある循環のまちづくりを作る町の取り組みということで、主な取り組みの内容をまとめてるんですけども、去年の3月11日に「もったいない宣言」というのを公表しまして、町議会で全会一致で議決をして、公表するということをやったんです。

これについては10年以内いわゆるゴミ処理をやめようと思ってます。全くやめようということをやったんです。

「もったいない宣言」というのは、10年以内にゴミ処理をすべてやめるというのが目標なんですけども、これ自体は住民と共有するまちづくりビジョンの一つだと思ってるんです。ゴミ処理をしないということは、単に町の対応だけではなくて暮らしの中でゴミを出さないような暮らし方をつくるということでもありますし、いわゆるリデュースですね。出てきたゴミを徹底的に資源ゴミ化していくということについても、住民と一緒にやらないとやれない。それは何のためにやるかという、今まではとにかく豊かさとか、便利さとか、そういうものを追い求めて来たわけですが、そういう社会が行き詰まっちゃってる。ひょっとしたら子供たちの時代に大変なツケを残してしまっているような状況になっているかもしれない。子供たちの未来のことを第一に考えて、そういうビジョンを示したんです。

この町の取り組みの一つの集大成として10年後にゴミ処理をしないというのが、大木町にとって非常に大きな目標になるのかなとは思ってるんですけどね。

## バイオマスタウン構想にも手をあげた！

あと、そのほかにもバイオマス活用ということについても、バイオマスタウン構想は、一番最初に手をあげてますし。このくるるんにおいて、し尿・浄化槽汚泥とか、生ゴミをすべて、バイオマス資源として、エネルギーとか、有機肥料を作るという取り組みをやってますし、菜の花プロジェクトとかもですね、今、着々と進めています。



（資料提供：大木町）

再生可能なエネルギーについても、省エネも含めて、取り組みを進めてるというような状況ですね。その具体的な成果ということでいえば、今の到達点としては、10年先2016年にゴミをゼロにするということなんですけども、2005年を基準年にして2007年の目標が、燃えないゴミ、燃やすゴミ合わせて36%以上減らそうと。2009年に70%以上減らそうというのが当面の目標で、2007年は44%ゴミ処理を減らしたという実績にはなってます。これは、まず第一段階で、ゴミ処理を減らすということは、一つの手段ではあるけれど目的ではないんです。もともと無駄のない暮らしを作るということが目的ですから、そういう暮らしを町民の中にいかに根付かせていくのかというのが最大の目標です。

## リサイクルも減らす！

一番根本はゴミを出さないような仕組み作りですね。ゴミをつくらない。ゴミを作らないということで、この目標の一つにリサイクルを減らすというのも大きな目標としてあるんですよ。とにかく分別してリサイクルすればそれでいいじゃないかというのは全く間違い。リサイクルというのは最後の手段、あくまでもリデュースが基本で、その次がリユースで、最後にリサイクルという、そういう原則を常に踏まえていかないと間違ってしまう。

平成7年に大木町が分別を始めた時に、リサイクル万能主義を町民に説いて回ったことがあるんですけども、あれは全く間違いだったと思います。基本的に缶とかビンのリサイクルすることでエネルギーと資源の節約になる部分はあるんですけど、それが、根本的な解決になるかっていうと全くならないとわかったんです。

今、考えてみたら。リサイクルばかりが増えてお金ばかりかかって、それで資源の節約とかそういうことになってるかというと、全くなっていないという状況ですから、そういう意味では缶とかビンとかペットボトルとかも含めてリサイクルも同時に減らしていくことも考えていかなきゃいけない。大事ですね。

ただ、それをやるのに自分たちでできることとやっぱり基本的にバイオマス、僕はバイオマス加速化戦略委員というのになってるんですが、カーボンニュートラルの資源を活用していくことだろうと思うんですけども。

個々の取り組みというのももちろん重要なんですけど一番大事なのは政策ですよ。法制度、国はEPRとかそういうものをきちっと制度化するか、デポジットを作るとか、炭素税をどうするかという問題とか、そういうのがないと、それぞれ個々でやれと言われてもまず進まないだろうと思います。

そこなんでしょうけど。本当に大事なところは。

バイオマスなんかでも、例えば生ゴミ、ほとんどの自治体は燃やしているけども、例えば5年以内に燃やすなといえれば減らしますよね。ですから根本的な制度を変えないと、自助努力でこっちの方がどっちかっていうといいよといいながら片方では焼却施設を作らせるとかね。ということをやっても、進まないですよ。

制度ももちろん、私たちとしては国にお願いしていきたいし、町の中で出来る制度も変えていきたい。

ゴミとして、自分はどうしても分別するのが嫌だという人もいると思うんですよ。それはそれでいいと思う。僕はそれを拒むわけでもなんでもない。ただ、町の政策として、主流はゴミにしないということだと。だから、今ゴミの有料化の問題

がありますけど、大木町はゴミ処理はあくまで例外的なものだと思ってます。基本的にはすべて資源化する。だから、大木町は制度を、資源化することに主流を置いてやっていきますからそちらの方にはお金を使うけれども、ゴミ処理のほうにはお金を使わない仕組み。具体的には自分はどうしても分けるのがいやだ、ゴミとして出したいという人はいてもいいんだけど、その人たちについては例えばゴミ処理料は負担してもらおうとか、そういうような制度を作っていけないと、単にゴミを減らしましょうとか、分別しましょうとかいってもらちがあかないんですね。

そういう町ができる制度をつくる。国にもそういう制度をお願いしていく。そういうことしながら呼びかけていって、全体としてゴミの出ない暮らし方を、町の中に定着をさせていくということをこれからやっていくのかなと思っています。

## 大木町の挑戦！

基本的には、持続可能な町、地域の自立ですよ。極端な話をすれば、今の時代、役場がいつまでもつかわからないというような、ずっと役場があるのかもわからない。役場がなくても、例えば地域が自立していける、その中で地域の豊かさ、新しい豊かさが、地域の中で共有できる。で、お互いに役割分担をしながら地域が自立をしていくということになると、その社会はまさしく持続可能で、例えばゴミとかも出さない、無駄のない、そういうような暮らしのできるような社会になるという。それが目標なんでしょうね。地域づくりとしてはやっぱりそういう町を作って次の世代にどんどんバトンタッチしていけるような、そういう地域づくりをしていくという、あらたな価値観を地域の中に作っていくことが大事なことだと思っているんです。

ですから、住民同士のコミュニティが大切だったことですね。伝わっていかなくちゃ意味ないですもんね。

本当に住んでいる人が大木町に住んでよかったと思えるような、そういう地域が作れて、それがなおかつ、今までのようにお金とか物とかの中心の社会ではなくて、お互いに協力して、自然を大事にし、その地域の豊かさを共有できるような、そういう暮らし方が地域で出来れば、そして、そういうような地域がいろんなどころにできることで、国全体としても、持続可能な社会として、成り立っていくのかなあと思うんですけど。

それぞれ地域は全く違いますから、今まではどちらかという画一的な地域づくりに向かってきたところがあるんですけども、これからはまさしくそれぞれの地域資源をいかに活用して、オリジナルなまちづくりをやっていくのか、その町独特のまちづくりをやっていくのか、そういうことだ

と思ってる。そこに住んでる人が、そういうまちづくりに対して、胸を張って、自慢できるというか、本当によかったと思えるようなものが出来れば、それぞれの地域で、全体として、非常によくなるのかなと思うのですけれどね。



大木町の取組みには全く驚かされる。10年後にはゴミゼロを目指すという「大木町もったいない宣言」（ゼロ・ウエイスト宣言）。これが成功すれば世界に誇れる先進事例であろう。現代生活を考えると「夢」のような目標に一瞬思えるのだが、じっくり考えてみると正論なのである。これは是非とも期待したい。ゴミが出ないことが豊かである・幸せである証明をしていただきたい。大いに応援させていただきたいし、ご協力もしたい。

それとは裏腹に、取材を終え、東京の都会の喧騒を歩いていると、消費とゴミしか見えないような気にもなってくる。平気でゴミを捨てる子供たちをみると、なにやら大木町での取材が幻のようにも錯覚する。

だからこそ、何らかの成功を期待したい。自分一人だけそのような挑戦をしようとしても周りがそうでなければ困難。しかし、周りが皆同じであればできるかもしれない。環境とはそういう性格のものだ。

大木町の皆さん、よろしく願います。

聞き手 鈴木順一朗



九州・地域活性のキーパーソン

## 阿蘇地域振興デザインセンター事務局長 坂元英俊さん

阿蘇の地域デザイン  
ゆっくり・のんびり阿蘇大陸

阿蘇地域振興デザインセンター 事務局長 坂元英俊

昭和29年 熊本県南阿蘇村 生まれ。大学卒業後、農林水産省の外郭団体である財団法人日本農業土木総合研究所研究員として、全国の農村総合整備計画などの対策に携わる。その後、民間のコンサルタントで九州各県の地域振興計画や特産品等のブランド開発を行う。その後福岡県八女郡星野村・財団法人星のふるさとの専務理事を経て熊本県と阿蘇郡12町村で設立された財団法人阿蘇地域振興デザインセンター事務局長に就任。

阿蘇地域振興デザインセンターは阿蘇を活用した「阿蘇カルデラツーリズム」を提唱。ゆっくり、のんびり、素顔の阿蘇に触れる新しい旅の形、エコツーリズム・グリーンツーリズム・タウンツーリズムがネットワークされ、公共交通で結ばれる「スローな阿蘇づくり」を推進する。

今回は、阿蘇にこの人ありと言われるやり手仕掛け人、坂元さんに、今後のビジョンについて伺った。

阿蘇地域振興デザインセンターの  
ミッションは、阿蘇地域の「過去・現在・未来を考える」こと

阿蘇地域（1市7町村）の過去、現在、未来を考えるのが阿蘇地域振興デザインセンターの役割です。なぜ過去を考えるのかっていうと、阿蘇地域はものすごく歴史があって、例えば、古墳や神社ひとつとっても2000年に及びます。それから、阿蘇カルデラは28万年の噴火から形づくられています。火山だとか自然とか歴史っていうのは、過去からの継続的な営みですよ。だから、その過去を考えるということは、実は未来を考えていくということにもなってきます。それを私たちは、先だけを見るだけじゃなくて、今、その守るべきものは何なのかということもきちっとわかっておかないと、何でもかんでも情報として出してしまうことによって、失っていくものって結構あるんですよ。だから、情報を出さないほうがいいものもあるし、ちゃんと情報を出して地域のよさを知ってもらってということも大事。地域づくりは未来を創る材料としてまず過去と現在を考え、今を生きる地域の人々のことも同時に考えることが必要だと思っています。

過去・現在・未来に通ずる大きな  
軸を意識しながら未来へ向かう！

現在というのは過去と未来をつなぐ「今」ですから、今をどう見ていくかによって、未来が創られていくわけですね。過去から未来というのは、常に進化するようにしたいですね。

ですから「今」の時点で過去からのつながりを見ながら、さらに「今」からつながっていく未来を見ていくなら、つながりの中で変化した自分たちが新しい未来を創り出していくというように考えています。

阿蘇地域振興デザインセンターは、阿蘇地域振興デザインセンターと行政（県・市町村）と阿蘇の地域住民との中間支援組織としての役割を持ち地域の過去・現在・未来、そこから派生してくる環境や観光を常に時間軸で捉えながら、今やらな



きゃいけないことを地域づくりとしてやっていく財団なんです。

## 環境と景観が地域の価値を上げる

地域づくりを基本にして、観光も考えていくんですが、行きつくところは環境だとか、景観を一番大事にしなきゃいけないものだと思うんです。環境や景観が地域に付加価値をつけて、未来に対して残るものだと思うんですよ。ところがじゃあ今の段階で環境を守らないかんですよ、景観こういう風にしましょうって言うても、それは実は住んでいる人たちと一緒にやることなんです。上から押さえつけるんじゃなくて、自分たちが自分たちの地域として、その良さに気づき、そこで暮らせるということが実はものすごく大事なんだということに気づいてもらうことが必要なんです。

でも、その時に、環境や景観のことを先に言うてしまうと地域の人たちには見慣れた景色です、わからないことが多いんですね。ですから、

「人」が自分たちのところに来てくれるという、つまり、人が来るっていうことは観光的なことじゃなくて、自分たちの暮らしや景観や環境の場に人が来ることによって、「ここはいいとこですね、こんなに深い歴史があるんですね」と声をかけられた時に、自分たちが暮らしている場合は、「訪れた人たちが結構良いて言ってくれるよね」と気づくわけです。

実はそこからすべてが始まっていくので、まずは人が来るようにしていくことだろうと思っているんです。それには、見せるもの、大事に守るものなど自分たちが持っている地域の宝に気づかなければならない。地域資源を活用するっていうのも、地域の取捨選択が必要で、地域の持つ良さを取捨選択しながら、その良さを前面に出して、自分たちのところに来てもらおうと考えると、実はわりと次元がアップするんです。それは何でかっていうと、自分たちが住んでいるところの良さがわかるということは、いいところを見つけ出せるということなんです。ついつい自分の周りを悪いものだらけに見てしまう人がいますが「良い所」に気づけば、季節の移ろいや、草花の四季を通じた変化を、いい雰囲気だと思えるようになる、季節の変化に心を和ませる気持ちが訪れる人々にも伝わっていく。だから、私たちは地域をプラスに見ていくんです。本当に大事な環境や景観を住民が地域づくりの中で培っていくことにつながります。気持ちが向上していくってということなんです。そういう気持ちが出来上がっていくことによって、地域の良さや環境は自分たちで守らないと、実は守れないんだということに気づいていくわけですよ。これでまた未来が変わっていくわけです。

まず、第1段階の地域づくりがあって、地域づくりをベースにして、人に来てもらう段階になる。これが第2段階だということです。エコ、グリーン、タウンツーリズムは、基本的な生活の場を活用します。草原だとか、商店街、農村の集落ですね。そして、生活の場としての暮らしを守っていくという、つまり暮らしが続けられないと、いくら環境を守ると言っても、人の関係がなくなっていくんですね。人がみんないなくなって、環境景観を守れなくなっていくことは、大きな意味で自然に還り地球のためにはいいのかも知れないけども。人間が自分たちの地域・自然と共存していく暮らしの中で意識が上がり、未来もちゃんと自分達のものとして作り出していくことができるように、あるいは、守ることができるという認識も含めて、阿蘇カルデラツーリズムを進めていっているわけです。

## 阿蘇カルデラツーリズムは 今は「五合目」あたり

水基っていう、店先で湧き水が飲める門前町商店街があります。タウンツーリズムの商店街モデルという位置づけです。ここでは、自分たちの暮らしをどう楽しんでいくかということに基本を置いて、地域の暮らしや食材から生まれてくる商品が、お客さまから求められるものであれば、当然人は集まって来てくれると考えて、人気が出てきました。また、2000年以上続く国造神社の周りに古墳もある手野集落では、初めは自分たちの暮らししている場所がちょっともいいと思わなくて、とにかく神社に来てもらってお賽銭上げてもらえばいい、くらいなことだったんですけど、そうじゃなくて、やっぱり自分達の集落に来てもらったら地域の案内をして、その良さをちゃんとお客様に伝えていくという取り組みを始めたんですね。集落の案内です。そうすると、自分達が暮らししている場所に来てもらって案内すると、良さがわかり、結果的に神社にも行ってくれるようになります。これが成果なんですね。人が来るようになると、さらに自分たちのいるところの良さもわかってくるわけです。良さがわかると地域に誇りを持つことができる。暮らしの継続の原点部分です。農家民宿や農家レストランも集落内にあり、暮らしも成立させながら、観光的な部分も考えていくということになります。まずは、できる地域から、取り組みをしていく。うまく地域側から動き始めて人を受け入れるというキャパシティが出来上がって初めて、人に来てもらうか、来てもらわないのかという判断も自分たちですらわけてもらいます。来てもらうってことであれば、農家民宿だとか、あるいは案内とか。そういうことができるようにしていくことがツーリズムだと位置づけているんです。

地域にツーリズムが根付くためには、まず観光側から見るとじゃなくて、地域づくりのほうから見ながら、少しずつ地域と人の変化をもたらしていくということが大切なんです。



(写真提供：阿蘇振興デザインセンター)

このガイドブックは地域づくりをしながら、循環バスなどの社会実験を繰り返し、通年運行までこぎつけた地域を掲載しています。平成14年からだから6年はかかったんです。ここまで作り上げていくのに徐々にエリアごとにですね。あと2年



くらいで地域で人を受け入れる全体がつながり、循環バスなどの公共交通が、作り上げられているので、ちょうど平成23年の3月九州新幹線鹿児島ルート全線開業を目標に総合化していこうかなと考えています。

それが、阿蘇カルデラツーリズム博覧会です。阿蘇カルデラツーリズムと公共交通の一体化を図った取り組みのお披露目でもあります。

これからの阿蘇地域は、今までの車の観光だけではなく公共交通機関を使った滞在型の旅行を考えていく。日帰りを1泊に、1泊を2泊に、2泊を3泊にして滞在することによって、より深く地域のことを知り、地域の人と交流することができる。旅館に泊まったり、農家民宿に泊まりながら2、3日いることによって、お客様が阿蘇の良さに気づいてくれる。実はこういう仕組みを作り大切なお客様が、行けるようにすることは、観光的なものを渡り歩くだけではなく、滞在して、本当の意味で阿蘇の良さを楽しめる、あるいは、感じられるようにするために、お客様から求められる滞在型観光を考えていく。時代の流れを見据えていきながら、これからの未来を準備する。阿蘇を日本で一番滞在に適した場所にしたいし、適していると思っています。

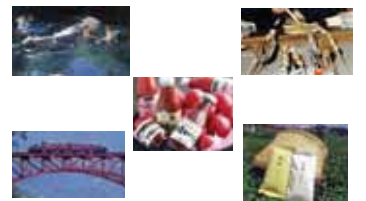
もちろん公共交通も、地域も、受け皿がきちっとしているから阿蘇での滞在型ツーリズムが面白くなるという考え方でやっています。阿蘇カルデラツーリズムの出来具合は、今5合目くらいだと思います。そして、観光との一体化は、平成23年の3月から始める阿蘇カルデラツーリズムの博覧会、旅博。いわゆる滞在型の旅博なんですけどもそういったものが、だいたい7合目かなあと。そこからが真のスタートです。

## 地域住民意識をどう変えていくか？

例えば住人が一万人いるとするれば、一万人の意識を変えていかなきゃいけないわけですかね？違いますよね。まずは、地域の対象者は地域を良くしようと考える人たちだとか、自主的に地域づくりを進めている人たちとか、そういう人たちと一緒に地域づくりを始めることが一番ですよ。集落の田んぼに、レンゲを植えたり、川の土手にコスモスを植えたりしながら暮らしや景観を楽しんでいる人たちがある、そういう地域から広げていく。それから地域情報を発信して、そこに人が訪れるようにしていくことが大切なんです。

そういう取り組みは地域でワークショップをすることで進めます。自分たちのところに何があるってここだったらどういことができるのかを考えてプログラムづくりをします。すると、基本的なところで地域づくりって何だろうとか、地域のテーマや特徴を見つけ出していく必要が生じてくる。地域の案内ポイントを決めコースづくりが出来上がると、デザインセンターには視察が多いので、地域に紹介します。地域がある程度できた段階で、じゃあ、何月何日、15人來られるので、2班くらいに分けて案内してもらってもいいですか？というように進めていく。テスト的に受け入れながらお客様のリアクションを確かめて感触を感じてもらって、案内の練習をしていくんです。

地域への働きかけは、タイミングが合わないダメなんです。地域の人が阿蘇地域振興デザインセンターに相談にきたときとか、地域が求めているものとちょっとびたっとくるように相談に乗らないと、こちらから、何か、おせっかいみたいにしてもダメなんです。地域の求めに応じたようにすると結構すんなりいきます。押し付けちゃダメっていうことです。自分たちが自分たちのためにすると思ってもらうことが大事なんです。だからやっぱりまずは一緒にやりましょう、から始まる。



(写真提供：阿蘇振興デザインセンター)

## 地域への理解、更なる集客のため 広報活動は欠かせない！

今行なっている広報で、一番アクセスがあるのは、阿蘇テレビという動画のサイトですね。一日1万から1万3千くらいのアクセスがあって。取り組みを進めるところから映像を作成し、動画にして配信していく。テレビ局は、これを見て取材に来られるんですよ。

地域と観光客への相乗効果は両方ありますね。地元の人は、映像化されることによって、取り組みが評価される。外からの人はあそこに行ってみ

たいということになりますよね。地域づくりは大変でもここまでくると地域にも良い効果があると思うんです。

それから「阿蘇ナビ」という、携帯電話で阿蘇のイベントや商店などの情報が見れる仕組みもあります。今年は地図もグーグルアースを取り入れ画面に出せるようにしました。ポイントが貯まるスタンプラリーは、携帯でお店のQRコードをキャッシュでやるとできます。このお店はどうだったという評価を書いてもらうと、お客様にはクーポンが付いて自分の書き込み量でランクが付く。そういうことも事業としてやってます携帯電話で。

阿蘇テレビの動画も30秒くらいに短くして、エコツアーや地域ツーリズムの紹介もしています。平成23年の九州新幹線鹿児島ルートの特設開業までには、紙と携帯と、ホームページと阿蘇テレビで総合的に広報活動をやっていきます。

阿蘇は火口観光と温泉が有名ですが、地域づくりやエコツーリズムなどの要素を入れ込んで、新しいイメージで滞在できる阿蘇をピーアールしていきます。熊本県の新幹線くまもと創りプロジェクトは関西方面なので昨年からはテレビ番組を作っていて、大阪と広島で、特別番組として流しています。今年も番組そのものは、熊本で作ってるんですけど、熊本のテレビ局から広島放送で流してもらったり大阪のテレビ局で流してもらったりしながら新しい阿蘇のイメージを打ち出しています。東京は、東京のテレビ局、制作会社といろいろやり取りをされていていいタイミングで滞在型の阿蘇を出そうと思っています。全国向けには東京でもんね。

## 「阿蘇カルデラ博」

「阿蘇カルデラ博」はこれまで阿蘇地域で取り組んできた阿蘇カルデラツーリズムを、九州新幹線鹿児島ルートの特設開業を契機に、総合化してピーアールしていこうという内容です。ツーリズムとイベントだけではなく、阿蘇神社の農耕祭事を前面に打ち出し、訪れる人をもてなす地域の皆さん一人ひとりが主役となる阿蘇全域を舞台とした参加型博覧会です。

阿蘇カルデラツーリズムは 熊本県のKANSAI戦略と連携し、滞在交流の案内機能として、エリアごとのコンシェルジュ的（ホテルで泊まり客の求めに応じて街の地理案内や交通機関・観劇の切符の手配などをする係のことをコンシェルジュという）な取り組みをします。博覧会なので、商店街や集落、阿蘇山上などを、パビリオンに位置づけて、エコツアーや体験などのコンテンツをちりばめ、旅のコンシェルジュ機能が有効に働くようにしたり、情報はすべて携帯電話で取れるようにしたい。

平成21年度の4月から1年間は阿蘇カルデラツーリズムの仕上げ。平成22年度の1年間は、阿



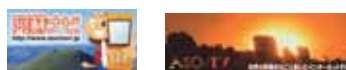
蘇カルデラ博のプロモーション活動です。予約が取り始められるようにしていこうと思います。

ツーリズムは基本的に人がすべてです。地域の人が生活する商店街や農村とも連携したエコツアーを作り上げていく。グリーンツーリズムが主になる暮らしめぐりは、平成19年と平成20年の10月もやって、だいたい体制ができてるので、これはそのままカルデラ博の地域単位の実行委員会へ持っていけます。

もちろん1年間の博覧会をやりませんが、この体制はそのままずっと残るんです。だから2年後もその体制のまま滞在型の観光システムを作り上げて、それがずーっと続くようにしていきます。

今は阿蘇の取り組みの視察がものすごく多いです。阿蘇カルデラ博を含めて、どんどん今、宣伝をしているんです。そうすると、観光の部分での誘客と、滞在として地域ツーリズムにつなげる部分が一体化していきます。

それから、今まで観光客が土日中心の車型だったものに、滞在型を導入することによって平日中心の公共交通ベースも付加され、誘客のプラスアルファが上積みされますよね。それで、滞在交流型観光の全国のトップに行くことで、認知度が高まります。観光圏整備事業という観光庁ができた最初の取り組みの事業は、阿蘇とくじゅうが連携して進めています。阿蘇くじゅうは国立公園ですからね。地域づくりから地域ツーリズムに発展し観光との一体化を図り、公共交通までリンクしてるなんていうのは日本全国あまりないですから、滞在交流型観光を進める阿蘇としての話題性を作り出していけるかなと思っています。



(写真提供：阿蘇振興デザインセンター)

## どうしても阿蘇を元気にしたい！

まず阿蘇の魅力を高めるためには、訪れるお客さまと阿蘇の地域が、人の関係を深めることで、もっと阿蘇の地域を知り、また、あの人に会いに行きたいって、思っていたことですよ。つまりどう自分と阿蘇がつながっているのか実感していただくこと。阿蘇の自然環境に生かされ、自分のお気に入りの場所ができて、この季節にこの街に行きたくなる関係性ができるといいですね。お客様自身と阿蘇の関係が出来上がってることがリピートの一番のポイントなんです。そして、自分と阿蘇の関係性ができると、阿蘇に行けば元気になるって帰れると思ってもらえるといいですね。あるいは地域そのものも、原点に戻って地域にもともとあるものを認識して活用したり、自然とのつながりを自覚して未来を考えれば自分たちが生きていくための環境への配慮も生まれる。そういうことができているよう取り組んでいきたいと思っています。

これだけ精力的に話をされる人は珍しい。次から次へと「阿蘇への思い」が溢れ出す。地元を愛し、必ず活性化させるという意欲が待たないで感じられる。

坂元さんは、さすがにその経歴を見てもわかるように地域づくりのプロである。であるから、阿蘇の活性化に期待するなどという言葉は、今回は、あえて使いたくない。よろしくお祈りします！といった気持ちである。

坂元さんの役割はもちろん阿蘇活性化の仕掛け人としてばりばり走っていただきたいのだが、実は、こういう「アイデアが溢れ出す頭脳を持ち主」は、もう一つの使い方がある。それは、どんどん質問し、地域活性化のヒントをどんどんいただくことである。是非、悩める地域の人々は坂元さんを訪ね、質問をし、具体的なアドバイスをもらっていただきたい。

それにより、インタビューの中でも言っておられた、お任せするだけの活性化ではない住民主導型の活性化にさらに近づくことになる。

聞き手 鈴木順一郎



九州・地域活性のキーパーソン

## 熊本県氷川町 宮原好きネット 岩本剛さん

若い力がまちづくりの中心！  
全国に広がる応援団ネットワーク

氷川町役場 宮原振興局 農地整備課  
宮原好きネット 支配人 岩本剛さん

46歳。氷川町役場に勤務。宮原好きネット支配人のほか、まちづくり情報銀行をはじめ、里山クラブ『どんごろす』事務局長など様々な肩書きを持ち、地域づくりの団体に広く関わる。

「宮原好きネット」は、宮原で町づくりのインターンを受け全国に散らばっている大学生がインターネットを通じて宮原を応援しようと立ち上げたのがきっかけ。宮原に関わった大学生さらに宮原の小中学校等を中心に、全国各地に広がるネットワークを築き、宮原の情報発信、会員相互の交流・情報交換を行い、インターンやゼミ合宿等を受け入れる主体となる。行政の力に頼るだけではなく、子どもたちを含めた住民と外からの応援団の力で将来を見据えたまちづくり戦略を実践。今回は、岩本さんに、これまでの経緯と未来への「夢」を伺った。



### やる気のない役場職員にエネルギーを使うんだったら「若い人たちに」、宮原を応援する大学生たちの声もあって誕生した「宮原好きネット」

### わらしべ交流

今はワークショップっていうのをよくやりますが、私たちが最初にやった時はまだどうものか、わからなくて、平成5～6年くらいですからね。じゃあ、子供をちょっと入れてやろうかっていう話になって始めました。子供たちも喜んでるし、地域のことを学んで、私たちもよかったです。将来のことも考え、子供も一緒に考えていかないと、子供も住民なんだから、という思いがあったんです。その後、住民参加でまちづくりをやるようになってことになりまして、最初は役場の全職員がもちろん動いたんですけども、その時、若い連中に言ったことは、上司の悪口言ってるヒマがあったら、今後の宮原のことを一緒に考えよう。今からいい感覚を持った子供たちが宮原で生まれてくるっていうか、とこころん状態で出すようになってくると思うので、その時のためにやってみようという話をして、2年間勉強会をやってたんです。

ですが、集まった職員は結局そこまでの思い入れはなかったんですね。じゃあ、どうするかっていうと、どっちみちエネルギーを使うんだったら役場の職員よりも、今から宮原を背負って立つ、若い人たちに、というのが一つ。そして、よそから来た大学生と子供たちが交流するのが非常に効果があるかもしれないと思ったんです。私もそれまでにいろいろなところで出会った大学生から元気をもらってましたので。

それで、小中高大学生がうまく動けるような組織が欲しいと思ったわけです。

最初は小中学校で動く組織と、その子供が成長していく中で今度は高校生大学生一般の人が活動する組織っていうのを作ろうと思いました。ところがうちの町には高校がないので、まず中学生の時にこういう活動が宮原にはあるんだということを知ってもらい、高校に行ってもこういう活動が宮原にはあるんだっていうのを見せる必要があるだろうと思ったわけです。それと、大阪や東京から多くの大学生が、インターンやゼミ合宿でこの宮原に毎年来ていて「宮原のまちづくり」に参加

してもらってまして、そういう学生たちの応援の声もあり、それがその後、宮原好きネットというのを立ち上げるきっかけになったんです。

### 宮原ネットの活動内容は

一つはですね、地元の子供たちと、大学生と大人で、今で言うところ、例えば、里山の地元の人たちだけだとなかなか同じこと言っても届かないようなことがありますね、大学生のような異質なものをに入れてみると、みんながちょっと仕方ねーなとかってすぐ動きだすんです。でも大人っていうのはすぐ大学生を甘やかすようになります。そこで子供を入れると、大学生は気合が入るんですよ。またそうすることによって、子供たちは大学生と里山の地元の人たちとも交流ができるという。なんかメリットのある交流をするっていうのが一つのインターンになるんですね。

そのインターン事業なんですけど、地域づくりインターン事業といまして、だいたい8月の2週間がメインになります。環境省さんから里山のモデルの指定を受けているものですから、そちらのほうを今は3年間は動いているんです。その前は、私が商店街再整備の担当だったので、商店街のちょっとした調査と、提案と、それと、子供たちの交流プログラム、イベントを盛り上げるためのことをやりました。

地域づくり・まちづくりの本質的な部分の議論を、里山でも商店街でも他の地域から研修でやってきた大学生と、地域の住民と、こどもたちとでやっています。

何よりも、交流することが大事なんです。スタンスも年齢も違う人たちがお互いに宮原というキーワードに向かって交流しながら刺激あっていく。そうするとそれぞれの認識の中で、宮原に対するきちんとした意識が生まれるんですね。

それと、わらしべ交流っていうのをやってまして、これが北海道から九州まで、北海道はニセコ、瀬棚町というところと、群馬の水戸、小布施と大阪と愛媛と福岡とうちで、お互いの産品を交換して、なるべくお金のやり取りをなくして産品で交流するというものです。例えば宮原が10万円分向こうからりんごを買ったら、小布施が宮原のみかんを10万円分買う。要は物の交流を通じて人との交流をつなげていこうというやつです。

そのわらしべ市っていうのを、毎年12月に、ここ宮原でやってるんです。そこに、農業者とか商業者とか、宮原の子供、大体県内にいる宮原好きネットの会の大学生とか、社会人になった連中が来るとさらに大きくなつたがりの輪が生まれる。今、大きい催しは宮原でやるのはこれくらいですね。前は雪祭りっていうのをやってたんですけど、それはトラックで雪を山から運んで来て、氷でアイスキャンデルを作るとかやりました。

それと、ネット上でうちがやりたいことは、例えばお歳暮大作戦っていうのをやってます。これは宮原のみかんとかを、遠方に送ろうという試み。目的は地域振興なんですけど地産振興をやるために、全国に散らばっている宮原好きネットのみんなのネットワークを使って、要はみんなが営業マンになるわけですよ。そのネットワークを使ってあちこちのPRをするという、これが地域振興を目的としたお歳暮大作戦です。



(写真提供：宮原好きネット)



## 宮原好きネットには 東北と関東と関西に支部がある

宮原好きネットには支部があるんですよ。この支部っていうのは、実は今の大学生が来る前、その頃早稲田の連中が宮原に来てまして、彼らとは今もお付き合いして、彼らが宮原まちづくりの原点のメンバーなんです。それで今はそれぞれが、コンサルタントになったり、大学の先生になったりして絶えず私たちのこととか宮原のことを応援してくれています。それが東北・関東・関西に広がって支部となっています。

長年やっているインターンとかで宮原に来た若者たちがだんだん増えてくるものですから、それで支部を彼らを作ったというわけです。今、35～36歳の連中です。それで関東とか関西で、単なる飲み会から、例えばインターンにいった連中が発表会をやったりして、その中で、社会人の先輩たちが、大学生たちにいろんなアドバイスをしあげる。きっかけは宮原好きネットですから、それをキーワードに集まった連中が、横のネットワーク、これは地域と人脈、そして、先輩と後輩といったような縦のネットワーク。これが広がりまた次のネットワーク作りをやっていく感じですかね。これが宮原好きネットを育ててきた成果の一つであり、大切な財産なんです。



(写真提供：宮原好きネット)

## 地元の子供たちを活動させる効果

その、地元の子供たちの活動効果なんです。まず保護者の皆さんたちが、いい経験をしてるねというのはよく言っていましたね。まちづくりっていうことが子供を通じて大人にとってもすごく身近なものになったと思います。

宮原にとってのまちづくりは、行政任せでなくて、住民が動いているという、また、多くの地元以外の宮原好きネットの人たちが動いているということが感じられるようになったんです。

今、こういうことに動いてるんだというのが、子供たちを通じて結果として住民の皆さんがほとんど知ってるということにつながりました。これまでの宮原まちづくり活動っていうのは、小さいですけど、地元の子供会の活動が該当すると思うんです。それが、宮原好きネットを介して違う分野にも子供たちが活躍できるということで、いい勉強してるなど、いう風に思っていましたね。

## 環境を考えた里山での 活動の難しさ

立神峡というその奥座敷はあくまでもひとつのシンボルみたいなもので、実際にそこを拠点にどれだけまわりに活動を広げられるかという公園内での環境学習プログラムをやっています。まずは優先順位をつけて、立神地区をなんとかする。で、立神地区の中でもどこをまず最初に手を入れるかっていうところから議論を始めまして、ここの地区は実は非常に難しい地区なんです。やっかみとか特に強い地区なんです。閉鎖的というか。だから、用心しないといけないもんですから、最初は2泊3日で大学生との交流をちょっと3年前にやってみて、だんだんと皆さんをその気にさせて。で、2年目からインターンと国際ワークキャンプで、8月の下旬と9月の下旬に2週間、若者を入れてやり始めてだんだんと地域の皆さんが大学生と交流することが楽しくなってきたということまでいきました。そこで、地元の地区に立神里山保全隊というのを作っているところから補助金を取って、結局、私たちの方でおこがましいことですが、お膳立てみたいなことをやってもですね、機会を自分たちで作ろうとしないんです。

こういった里山地域に人のネットワークを作り地域活性と環境保全を進めるといのはとても手間と時間がかかると感じましたので、あきらめず様々なアイデアを出しながら成果が出るよう来年度から取り組んでいきたいと思っています。

## 未来を担う子供たちへの期待！

私が一番楽しみにしているのは、最初の頃に交流した子が今、大学の4年生から社会人1年目くらいなんですけど、あと15年くらいすると、当時、自分たちがまちづくりってわからんけどもなんかやってみたい記憶はあると思うんですが、その子供たちの「こども」が同じようにまちづくりに参加する頃になるんです。

そうやってきた時が本当の勝負だと思ってまして、もちろん、宮原にいる子はほとんどいないと思うんですが、その時にまたそのネットワークを使ってどういうことが出来るんだろうということです。まちづくり的には、私的には「3世代」な



(写真提供：宮原好きネット)

んです。要は、愛町心みたいなものが生まれてよかったですかということですよ。その愛町心をくすぐるような作戦ってことになってくると、地域の産物を送ったりとかですね、あるいは暮らしている共生できる環境を守っておくとかそういうことだと思っているんです。私も今46ですから、そんなにあと何十年も生きるわけではないので、最低限あと15年間で1サイクルを形にして、卵が、次の卵をまた産むぐらいいまで、それぐらいいやっていたらなというところですよ。

一番はですね。やはり、教育だと思ってるもんですから、私が一番重要視するのは、おそらく宮原から90%、出て行く子供たちが、その時に自分はこの風で育ってきたと。こういうことを学んできた、そして、私は宮原の出身ですと。

つまりここで生まれて育ったことを誇りに思う人間になって欲しいんです。もちろん宮原の活性化っていうのはあるんですけども、これに関わった人たちが全国各地でまた同じような卵を産むことが私の一番の願いです。

そのために今、宮原好きネットの輪を絶やさず大きくしていこうと思っています。



岩本さんが目指すのは、3世代先への効果。まちづくりがそう簡単にはできないと正しい方向。だからこそ今できることに全力を注ぐ。宮原好きネットを通じて3世代先のために、今、ネットワークを全国に広げている。

そう言った中で、宮原が作ってきた大学生との全国ネットワークは、強力な武器だと感じた。宮原に大学は存在しないが、地元だけではできない部分を大学生たちとのネットワークを活かし推進している。

環境保護とまちづくりが急務な里山地域では、ついつい目の効果を目的としたまちづくり活動がよく見受けられるが、本当に地域を元気にするためには長い時間を要することが大切である。そのためにも、この宮原好きネットは3世代先まで継続させて欲しい。

ただ、3世代先だけを見ていくわけにもいかないので「今できること」・「次につながること」を同時に展開していく地域活性化が今、求められる手法なのかもしれない。

聞き手 鈴木順一朗



ひまわり亭オーナー 本田 節

昭和29年生まれ。93年「第3回九州女性サミット熊本人吉パーティ」実行委員長。95～02年人吉市議会議員（2期）。郷土料理研究家「郷土料理伝承塾」主宰。火の国未来づくりネットワーク会長。熊本ツーリズムコンソーシアム副会長。

「ひまわり亭」は人気の郷土家庭料理レストラン。こだわりは「もったいない」と「地産地消」。無農薬の地元産玄米と粟をいれたご飯と、化学調味料と食品添加物は使用せず、生産者の顔の見える地元食材を使い、安心・安全の食文化を普及。食の安全性と「食べ物の力」について精力的に語る本田節さんに、「食」のエコツーリズムについて伺った。

## 農山村の女性たちが自己表現する 場面を作りたい

ひまわりグループというボランティアグループがあって、一人暮らしの高齢者に声かけを兼ねて手作り弁当・宅配をやっているという活動が約20年前から始めていたんです。地域づくりのいろんなイベントにみんなでいろんな手作りのおにじめとかお饅頭とか作って出すということをやっていた。

そうするとやっぱり地域に農山村に女性たちっていうのがなかなか、自分を自己表現できる場面がなかったわけですよ。農村に住む女性っていうのはものが言えるような環境ではなかった。そういうところからどんどんみんなの思いがふつふつと湧いてきて、みんなでレストランをやろう！っていうことになって。

それで12年くらい前に、開業資金はどうするか、場所はどこのかって。だって女性は誰も自分名義の土地を持ってない。全部夫名義、親名義なんです。そこで、みんなで考えたのが法人化するかなど。やはり、外向けにも内向けにもきちっとした企業を起こすためには、きちっとした組織の中でやらないと、仲良しグループで終わっちゃうわけです。これではね、持続できる活動って出来ないんだと思ったときに、私たちの認識を高めていくためにも、みんなで会社を作ったわけです。そして、11年前に「ひまわり亭」をオープンしたということになります。



## 安心・安全、地産地消の郷土家庭料理で「健康」を考えた

私は3人の子供を産んで、育てる家庭の主婦っていう環境の中で、非常に「食」に対しての危機感を持ち始めたわけです。それはなぜかというところは私は今から15年前にがんを患ったわけです。それで自ら闘病生活をするというところから、日頃の食に対する考え方っていうのを根本的に変えなきゃいけない、という風に思ったわけです。もともと私は出身が相良村という田舎の農家の娘なのに、本当に自分の生き方とか、食に対する考え方よかったのかなというところを闘病生活の中で考えて1日3食365日平均年齢80まで食べてとしても9万食を食べていく「食」っていうのは、やはり健康が一番関わっていくんだと、いう風に思い直し、やはりもう一度食というものを考えていこうというのが、そもそもの原点になったわけです。

この地域で採れたものをやはり、食べていく、やはり地域の家庭の中で安全なものを食べていくというものを健康づくりの中にやっていくうちに本当に元気になったんです。私が実験台みたいな感じで元気になっていくわけですよ。そうすると、この喜びを自分ひとりじゃもったいないじゃない。同じ苦しみの人たちにもっと共有したいと。

そのためには場所が必要だし、仲間がいるし、年中どこかでそれを体感してもらって拠点作りが必要じゃないかっていうことに気づいたわけです。

それからそういう自分のきっかけという思いがどんどん膨らんでいっているような地域づくりの仲間が私を励ましてくれて、感動とか、喜びとか、いろんなものに目覚めていくわけですよ。

## キーワードはまさに 「もったいない」

地域の財産である、おばちゃんたちの経験、技ももったいないと思ったんです。

それから、この前を流れる日本三大急流の一つ



球磨川の恵みも大事にしないともったいないと。やはり、海が元気だということは、川なんだって。その時から、天命水の会っていう漁民の森を作っていた仲間と一緒に地域活動をやって、海からアサリ貝が消えたという話になって、行き着くところ、やっぱり山だったと。やっぱり海を考えると川なんだ、やっぱりその川から山なんだって気づいたときに、メッセージがあるなって考えて、上流の朝霧町にあった120年前の普通の民家をひまわり亭として移築したわけですよ。

木は生きている。木は呼吸している。木は再生できる。産業廃棄物にはならないんだ。そんな思いをメッセージとして伝えるためにここに変な鉄筋鉄骨の立派な建物じゃないものにして。その水屋ひとつだって壊れて捨てられていたのを木工屋さんにもう一回磨いてもらったらこうなっちゃうわけですよ。捨てられていた水屋ですよ。壊されていく建物ですよ。それが再利用できる。

そして家に眠る食器、座布団、もう着らない着物ももったいないって座布団作りました。我が家の中に眠っている引き出物、使わない食器、みんなももったいない。だからオープン当初はみんな、持ち寄ったんです。買わなかったの。っていうところから始めました。



ひまわり亭テラスから望む球磨川（写真提供：ひまわり亭）

## 地域の食材だって本当に「もったいない」

大量生産・大量消費・大量廃棄できない小規模農家が作っている、兼業農家で作ってるものは流通にのらない。これももったいない。ほんともったいないですよ。で、それをうちが買い上げるといふことによって、遊休地や荒廃地をどんどん耕して、そういうおかあちゃんたち、おばあちゃんたちがせっせとうちのために野菜を作ってくれている。そうすることによって、どんどん周りが美しくなって、みんなが、そういう地域にごみを、落とさなくなる。ということも含めて、地域に食材がもったいないっていうことを計画したのが今から12年前。それからみんなで、このキーワードを常にコンセプトにやっついこうと申し合わせたんです、こういうところからはじめたんですよ。

## 人間も「地産地消」

すべてのものにおいて地産地消って言える。人間っていうのも、農産物が適地適作っていうように、なんであの河内みかんがおいしいかっていうと、あの海風のミネラルは、あの温暖の中の気候の中で育っていくからあの海の恵みから河内みかんができる、じゃあ、こちらでりんごが育てるかっていうとそうじゃないように、やっぱりみんな適地適作の中で、もともと在来の農産物が育ってきたように、人間だって、この地域で生かされていくっていうことが大事だろうと思ったわけですよ。それもね60なんていう還暦を越したおばちゃんおばあちゃんって、すごい知恵があるわけですよ。その知恵がこの地にとって本当に役に立つ。だから人間も「地産地消」がいい。

もちろん最初からそう思っていたわけではなくてそれは私が、地域づくりの中で20数年の中でいろんな人々と出会って、いろんな地域に行って「すごいよこの地域は！」っていうような感覚を学ばせていただいて、それを伝えていくっていうことによって気づく。だからなかなか地域に住んでいる人っていうのは、当たり前だから、あえてそういう価値観に気づかなかったことが、交流というキーワードの中で私も、その人たちも気づかせてもらっているんです。



## 子供たちと食べ物をつなげたい

農家の人がどんな思いで、どんな形でできていくかっていうと、食べ物についてとおしくなっちゃうって言うんですよね。子供達も自分達で、やはりこう、稲を、それこそ田植えをやったり、その中で除草をやったり、そして稲刈りをやる。そうすると自分達の作ったそのもち米で餅をつくると、その餅がおいしいと思えるようになる。

大事なのはその流れが描けるかどうかっていうことですね。その過程が食卓と生産者の間から切れちゃったでしょ。流れの中で全部がきれちゃったでしょ。それで、スーパーにある切っただけのお魚がお魚だということになって。まさににわとりなんて描けない。牛だって描けない。一個のキャベツだって描けない時代に今なってるわけですから、そういう間が切れているものを、なるべく距離を近くしていこうという運動体として、うちみたいなのところがあるんだろうと思うんですよ。

## これからの地方の役割はつながりを体感していただくこと

本当にここ10数年病気をして途中再発をしているんですが、まあ、不安がないって言うこと嘘になるんですね。けれども、本当にその、食によって、健康になったことは事実です。だから私の両親が相良村で農業をやってくれてますから、私のためにせっせとお米をつくり、野菜をつくってくれています。私がこうやって、本当に元気になってきて一番に農業やってよかったと両親は言ってます。私の命を救えたと言ってます。だから、本当にそんな思いを伝えたいというのが、私のひまわり亭の原点にあるっていうことです。

私自身もね、環境や食べ物と自分とのつながりがつなげていなかったんですよ最初は。命の問題としても。だけど気がついてみると本当にみんながすべて循環していくわけですよ。循環できるような仕組みであれば、世の中うまくいくのに、循環できないものを作り始めたわけですから。

いろんなものを含めて、それが循環していくものであるということに気がつけば、人間が、再利用できる再使用できるということに行き着く。

だから、やっぱり私たち命のリレーはやっぱりこうやってほかに命がつながれていくわけですからね。そしてそこに、還っていく。

私も3人子供達が、産まれて育って、子供達が結婚をして、そこからまた命がずっと広がっていくと思ったら、人間もそうやって、ずーっとつながって循環しながらね、自然と一緒に生かされているんだってことを気づいていくということ。そういうことが、ツーリズムということによって、やはり都市に住む、そういう体験ができない方

ちが地方に来て、そして炊き立てのお米を食べたり、こういう自然の中に生かされた時に、体感の中で気づいていくきっかけ、それは都会ではできない、地方での役割だと思っています。やっぱり地方の役割はそういうものになっていくんだろうと思っていますんです。

だから今とても地方が抱えるものは重要だろうと思ってるんですよ。地方だからできるというものをね。

年間、いろんな交流も含めて5万人ひまわり亭に来ていただくみなさんたちに、そんな思いをねメッセージとして伝えたいと、私は思っています。



取材で訪れたのは、午後、客が少なくなった時間。まっすぐな気持ちでお話くださった本田節さん。年間5万人がひまわり亭を訪れるというのには驚かされた。彼女の人的魅力はいうまでもないが、何よりもその情熱の強さに人は魅かれ、動かされるのだろう。

今回は、ひまわり亭の目的を中心にお伺いしたが、本田さんは熊本県をはじめとして、各方面で地域活性のキーパーソンになられている。インタビューの中にも出てきたが、農山村の女性たちが活躍できる場を作り、実践で結果を出してきたところはおおいに評価すべきである。

また、グリーンツーリズムもエコツーリズムも「つながり」を理解することが大切と考える彼女の考えは、今後の九州地域におけるエコツーリズムと地域活性化において有効な先進事例となるだろう。

今後のご活躍に期待するところである。

聞き手 鈴木順一郎



九州・地域活性のキーパーソン

鹿児島県桜島

NPO 法人 桜島ミュージアム 理事長 福島大輔さん

島まるごとエコツーリズム  
桜島をまるごと博物館に！

NPO 法人桜島ミュージアム 福島大輔

35歳。2005年に、鹿児島島のシンボル「桜島」の魅力を多くの人に「見て感じてもらいたい」という思いから旧桜島役場の職員など10人のメンバーでNPO 法人を設立。

桜島をそのまま博物館と位置づけて、桜島そのものや火山・砂防に関する資料の収集保存や調査研究、教育普及活動などに取り組みながら「桜島ミュージアム」を目指す。その成果は、観光、教育、地域振興、福祉、防災等に活かされ、地域住民や観光客など、多くの人々に対する生涯・環境学習、地域振興に寄与している。

今回は若きリーダー福島氏に、設立から島へとけこむまでのお話を伺った。

## NPO 法人を桜島に 作った理由は二つ

本当の目的は多分2個くらいあって。自分の目的と、会としての目的と2つあると思うのですが正直に自分の目的から話しますと、自分の仕事を作らなかったということです。僕は博士号とったんですけども、その後非常勤講師とか、ポスドクの연구원とかいろいろやってたんですけど、だいたい日本のドクターって、3年ずつくらい食いつないで食いつないで、気づいたら40とかっていうことって普通にあるんですね。で、永久にポストにつけないとか。あるいは途中でやめて、あきらめて会社に勤めるとかいう人多いんです。そんな状況を目の当たりにして、夢がないと思って。このままずっと粘っていろいろ見ると、希望するポストに就くには、どうも実力ではなくてこれは運なんだってというのがなんとなくわかってきて、これはがんばってもしょうがないかなと思って。

じゃあ自分のスキルを生かして、何か、仕事を自分自身で作れないかな、と思ったときに、自分が出来ることは、火山についていろいろ詳しいということと、割と人に伝えるのが好きだったということで。学生時代にやったアルバイトがエコツーリズムのアルバイトだったんですね。その時僕はエコツーリズムなんて全然知らなくて、なんでこんな僕が普通に知ってることを説明するだけでその当時、学生でたかが2時間くらいガイドして2万円も3万円も貰えるなんて信じられなくてですね。こんなにたくさんもらっていいのかなと思ったんです。今思えば、そのくらい貰わないとやっつけられないことがわかったんですけど。

そういうアルバイトをしたことがあって、何かそういえば、ああいうのもあったよなと思って。ツアーガイドとして、火山を案内することで、自分の新しい仕事つくれるんじゃないかな、と思ったのがNPO 法人を立ち上げて桜島ミュージアムを作ろうと思った最初のきっかけだったんです。

でも、エコツアーのガイドをいろいろ調べていくと、屋久島はいろんな意味で、いい意味でも悪

い意味でも先進事例。例えば悪い面で行きますと住民とのいざこざじゃないですけどもあんまりいい関係が保てなかったっていう時もあったみたいで、その話を聞くと、なんかその、よそ者がほいって行って金儲けだけしても、実際あまり儲からなかったりするんですね。やっても地域に喜ばれないんだったら意味がないよなと思いついたんです。じゃあ、地域に喜ばれながら、自分のやりたいことをしっかりやっていくにはどうしたらいいかと思って、調べていたら、たまたまエコミュージアムっていう、言葉が浮かんできて。阿蘇で、阿蘇たにびと博物館というのをやっている梶原さんがいるんですけども、梶原さんが、エコミュージアムみたいなことをやってるということで、早速見に行ってみたんです。こういうやり方があるんだと思ってこれをまねしようと思って、桜島友の会だといって始めたのが、2002年の8月です。桜島友の会っていうのをスタートさせて、基本的には私ひとりなんですけど、知り合いをバーっと集めて、とりあえず桜島みんなで見え回ろうよっていう会を始めたのが一番最初のきっかけです。



その時に地域の方で協力してくれそうな人いませんかって、いろんな人に声をかけて、当時役場の方にお会いして。こんなことしたいんですけどって言ったら、その方は地域おこしとかまちづくりとかに熱心な方だったので、じゃあちょっと知り合い集めるかって言って、バーっと集めてきて。いきなり飲み会しながら「僕こんなことしたいんですよ」って言ったら「うち今度、大根植えやるからみんなでやろうよ」とかいうのから始まって少しずつ降りてきて広がって行って、現在に至るって感じなんです。それがまあ、僕自身のスタートの仕方なんですけど。

## コンセプトは「もったいない」

友の会とかミュージアムとかの表向きの基本コンセプトは何かというと、「もったいない」っていうことだと思うんですけど、それは何がもったいないかというと、桜島ってすごくいろんな地域資源があったり、自然の景観もそうですけども、産業とか、文化とか、いろいろなものがあるんですけど、すごく面白いところだと思うんですね。だけど、鹿児島市内の人から見れば、遠くから眺めるだけの山で、行っても何もすることないじゃないっていうイメージは圧倒的に強いです。

これは今でもそうです。もう、鹿児島県民のほとんどの方が、桜島に行っても展望場に行っても、あそこいくの？みたいな。ないよね？行くところっていう。それが正直なところで現在もそれはあまり変わってないですね。これをなんとか変えたいと思ったんです。僕自身は火山の視点で見ると面白いものいっぱいあるし、歴史の視点で見ると面白いものいっぱいあるし、そういったものをちゃんと面白さを伝えられて、地域資源をうまく活かすということができたらいいんじゃないかっていうのが、この桜島ミュージアムの基本コンセプトになるわけです。

ミュージアムとしてやるためには、地域を博物館として考えますから、いろんな情報を知らない

といけないうことで。僕ら自身がいろいろ「集める」っていうことですね、情報を。そしてそれを「見つめる」。価値を見出すっていうことですね。そしてうまく「広める」っていうこの3つをしっかりとやっていこうということなんです。普通の博物館ですと「集める」と「見つめる」部分が結構強くて、学芸員さんがオーってって喜んでそれでおしまいみたいところあるんですが、僕らはどちらかというと広める部分をメインにやって行きたいなということなんです。始めてみてとにかく今、桜島でおもしろいことをやればなんでもいい感じでスタートしました。

## 「つながっていること」を 皆さんに伝えたい

去年、アートプロジェクトっていうのをやったんですけど。アートのイベントやったんですが。分野は何にもとらわれないっていうことですね。われわれがこだわるのは地域だけですね。桜島っていう地域だけにこだわって、テーマはこだわらなくていい形にしていきました。それは僕が火山についていろいろと面白いことを伝えようと思っても、まず火山に興味がないですから、人は来ないわけですね。まず面白いと思ってもらうことが大事。皆さんが身近に思っているようなことをきっかけに、その裏側には僕が伝えたい火山みたいなものが、少しでも伝わればそれでいいかなということなんです。それを6年くらいやってきて思ったのは、いろんな「つながり」。必ずつながってるんですね、いろんなものが。産業も文化も自然も。

ですから、僕自身は火山について詳しいので、そこが一番説明できるのですが、例えば歴史の話をしながらか、いろいろと見ていくと、実はここは溶岩地形で、人があんまり住んでないとかこの辺は扇状地だから、農作物がよく育つとかいう話をしていく中で、実は火山ってこんなことがあったんですよっていうガイドをする。すると必ずどこかにつながりがあるんですね。縄文の遺跡と実は災害がつながっていたりとか。そういうつながりを伝えることで、あんなだ、世の中って結構いろんなものがつながってるんだっていうその辺を伝えるのが今一番面白いですし、それが多分、環境とか、いろんなものに気づくっていうことになる。身近なもの、身近じゃないものが実は全部つながってたりとかということに気づいてもらえるっていうことが、一番いいんじゃないかなと思って、今、活動してます。



(写真提供：桜島ミュージアム)

## ガイドには地元の方を？

そういうのはあまりできてなくて。最終的にはそういう風になって欲しいんですけど、なかなかそうはいかなくてですね。平日ほぼ毎日ここにボランティアさんが来てくれて、案内してくれてるんですけど。そのおじいさんは、もともとやっぱりよその人なんですね。桜島に住んでもう10年くらいになる人なんですけども。あとはやっぱりよその方ですね。うちのスタッフは全員鹿児島県外ですし、私以外は。ですから地元の方がなかなかいないということですね。今、ボランティアガイドさんも15人くらいいるんですけども、その方々もみんな桜島じゃない人ですね。みんな桜島に渡ってきてガイドしているということになってます。本当は地元の人にやってもらえれば一番いいんですが、なかなかそこまではいかない。当面はこうやってよそ者を使って、何かやっていって地元の人が「なんかあれやってるよね？」っていうように少しずつ気づいてもらって、私もやってみたいんですけどとかいう感じになってもらえればなど思ってます。

## 最近やっと協力して いただきやすくなってきた

全島民に対しての効果っていうのはあまりないんですけども、新聞にちょこちょこ載せていただいているのでみんな知ってはいるみたいなんです。それはだいたい浸透してきたのかなと思います。今度こういうこと協力して欲しいんですけどっていう感じにいくと協力してもらいやすくなってきましたね。昔は何それ？っていう感じだったんですけども。最近は「あーあの福島さんね」って感じで「いいよ、いいよ」ってしてくれる人が増えたってのもあるし。まあ全然知らない人っていうのももちろんいるんですが、割と新聞をよく読める方とか、地域について少し何とかしたいなと思ってる方とかはすごく協力的になってくれてます。そういう意味では少しずつ、考え方っていうか、桜島でなんかいいことしていきたいよねっていうような、雰囲気みたいなやつは少しずつ浸透してきたのかなっていう感じですね。

## 実際のNPO運営はなかなか厳しい

運営はなかなか厳しいですね。今本当に、行き当たりばったりというか、うまくいけばいくし、いかなければいけないとか。年度ごとの予算を何とか獲得しながらやっていくという形なので、取れなかった年は厳しいという感じですね。ですから、今年は20年度ですけども、19年度からは、結構いっぱい事業が取れたんですよ。モデル

事業も取れたし、委託事業ももらえたし。いろいろとあったんで、実は結構儲かったんですね。何百万か。ところが今年度は、全然とれなかったものですから、大赤字になってるんですね。ただ、来年度以降は、桜島ビジターセンターっていう県の持ち物なんですけども、そちらのほうを指定管理者でもらうことができたので、ある程度安定した収入が入ってくる、額は小さいんですけどね。ということで、来年度以降は少しずつ安定してくるのかなとは思ってるんですけども。

これまでは本当に事業をとってきてその事業を終わらせてっていう形でやってきましたのでほとんど単年度ですから、取ればラッキーだけと取れなければ苦しいという。そういうのを3～4年ずっと続けてきているという状況がありますね。

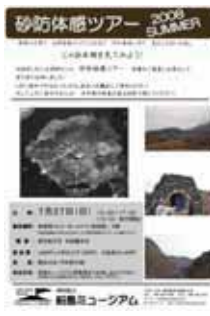
## インターネットでホームページ を見てきてくれる方が多い

ネットをみて連絡される方が一番多いです。不思議発見ツアーという形で、遊歩道を巡っていくようなどちらかという親子向けのような内容のやつがあるんですけども、こちらはそれなりに喜んでいただけてますが、これ以外はオーダーメイドですね、いろいろ研修旅行だったり観光旅行だったりするんですけども、お連れして一番喜ばれるのは、このすぐ近くに有村っていう地域があるんですけど、その砂浜を掘ると温泉が出てくる場所があるんですね。これが一番喜ばれますね。



(写真提供：桜島ミュージアム)

すごくいい体験をさせてもらったと。昨日も鹿児島国際大学っていうところの、社会人の学生さんと、中国人の留学生の方と一緒に連れてったんですけども、そこが一番面白かったっていうんです。非常にいい経験をさせてもらったっていうんですね。やっぱり体動かしたり物作ったりの体験型のほうが圧倒的に人気が高いんだなっていう気はします。あとは、おばちゃんとかが「へー」っていうやつが喜ぶですね。今まで知らなかったような知識。バスガイドみたいなもんなんですけども、内容はバスガイドと全然違って、実は日の丸と桜島はとても深い関係があるとか。バスの中でちょっと皆があまり知らないような、だけど日本の歴史と深くかかわっていたりとか、とても身近なものだったりするようなエピソードをお話すると、すごく喜んでいただけますね。圧倒的に喜んでもらえるのは、温泉を掘るという作業をするとか、活動をするとかすごく喜んでもらえます。



ツアー案内例（写真提供：桜島ミュージアム）

風呂マラソンっていうのをやってるんですけどもお風呂をずっと巡るっていう。温泉をずっとめぐる42キロのバスツアーなんですけど。ぼくら走るのめんどくさいからバスで行くんですが、そのときにも温泉掘ったりするんですが、一番よかったのは、もちろん掘るのも楽しんでもらえるんですけども、朝出発する前に、源泉がばーと流れているところがあるので、そこに卵を名前を書いて入れておいて、いろんなツアーをして、一番最後にそれをとって食べるんですよ。ご飯用意して卵かけて食べるんですけど、それが一番喜んでもらえますね。今までの解説どうでもよかったのかっていうくらい。感想が「卵おいしかった」！終わりよければすべてよしっていうんですけど、そこまでの途中があるから意味もあるんですけども。とにかく温泉ネタのやつは特に人気かもしれないですね。

## やはり桜島の「火山の魅力」は伝えたい

植生については、毎度、必ず話をしているんです。それは、僕が面白いと思ってるんですけども、桜島は植生の変化が一番面白いと思っていてそれはなぜかという、溶岩がいろんな時代に流れてきて、そのたびに植生を破壊してって、リセットされた状態から、ゼロから無機質のものから植物が生えてくる。一次遷移が全部見れる状況でいろんな時代がありますから、だいたい200～300年分くらいは一周回れば全部本物を見て回れるんです。空から見たときが一番わかりやすいわけですけども、昭和溶岩っていわれる部分は、植物が生えてなくなって、大正時代に流れてきたやつなんか、ぼつぼつぼつって植物が生えている。江戸時代になりますともう森になってる。この様子を実際に説明しながらお話をしていきますし展望所なんかに行ったときも、目の前に見える景色を説明するときには、これは噴火前の様子でカラス島っていう島があったんですけど、これ溶岩に埋もれてなくなってなくなっていることを話したり、ドーナツ状の瀬があるんですけども。これ今でも残ってるんですけども。これは埋もれてなくなって溶岩だらけになってる。ここからここまでは自然に回復してきてるんですよっていう話をする。今見ると全然溶岩っていう感じがしないんですけど

逆に植生を目で追っていくと、どれくらいの溶岩の広がりがあるかっていうのがよくわかるんですね。そうすると、目に見えなかった、溶岩も見えし、植生の回復してくる様子っていうのが見えるし、今みなさんが見てる景色っていうのは今しか見れない。30年後になったら、また違った景色になってますよっていう話をするんですけども。そういう植生の話はかならず僕を入れるようにしてます。それが一番面白いと思ってるから。そういう部分が桜島の知っていただきたいところですね。



（写真提供：桜島ミュージアム）

## 環境専門ではないがやはり「環境」のサポートが多い

うちは別に環境メインでやってるわけじゃないんですが、よく環境関係ではないかっていうことで、いろんなところからお声掛けいただけてます。そんなに環境をくそ真面目にやってるわけではないんですけど、僕自身はいろんなものつながりを伝えること自体が環境教育だと思ってるので、想像力を働かせるっていうことが、多分、環境にとって一番大事なことだと思うんですね。

なので、あまりこれが環境ですっていう形ではやってないんですが、自然の中を歩く、自然観察会とかトレッキングをもちろんやってますし、だけどそれは、どちらかという自然を知ってもらいたいっていう、まず知る、気づいてもらいたいところをメインにやっています。

環境環境でやってるわけではないんですがたまにくるのは例えばゴミ拾いしたいのでコーディネートして下さいとかが来て、うちもクリーンアップ作戦とかやったことがありますので。世界ゴミ調査キャンペーンっていうやつですね。あれの調査の方法と同じ方法でゴミの数と種類を数えてカウントしていくっていうやり方で。それを小学校とか、総合学習のサポートも入ってますので。ある中学校には、僕らも4年くらい、年間を通して総合学習をサポートするっていう形が入ってます。だから月に2回くらいは中学校に必ず行って、子供たちの様子を見て、アドバイスを少しずつしていくっていうことをやってるんですけど、この間は12月にすごく環境活動に熱心な会社が、社員研修旅行で、桜島の国立公園の中でゴミ拾いをしたいというのがあって、130人くらい海岸に連れて行ってゴミ拾いをしようって。それで今日は単なるゴミ拾いじゃなくて、ゴミの種類と数を数えますっていうことをやりました。

## 地域住民の「環境意識」は？

環境意識というよりも火山災害という意味でシビアっていうか、他の地域に比べると火山に対する考え方が圧倒的に違うと思います。それが環境だと捉えれば、環境意識は高いんですけども、どちらかというと、防災意識が高いという形になるかもしれませんね。

火山灰が降れば農作物の被害も一番大きいですが、実は健康被害とか、生活の被害ってあんまりないんですね。大変なだけども、別に生きていけないわけではない。大雪が降る地域っていうのは僕はあまり変わらないって言うてるんですけど。大雪が降る地域は、雪が降って大変で、キツイけれども別に生きていけないわけではない。たくさん人が住んでるわけですよ。火山灰が降ってくるのも、別に降ってきたから死ぬわけじゃないしどうこうなるわけじゃない、結構煙がわーって上がったって、火山灰が舞い上がって、大変は大変だけども、生きていけるっていう状況です。

ただ農業だけに関してはですね、火山灰が降るとかなり被害がでます。ですから、農家の方はシビアです、すごく。昭和50年代くらいが一番火山灰の降灰がひどかった時期は、大半の方が農業を辞めて、サラリーマンとして鹿児島市内に出かける方が圧倒的に多かったですから、そのくらい被害は甚大だった。そういう意味で、火山灰に対しては、すごく敏感といえば敏感ですね。

## 変わってきた意識「どう地域が幸せになるか」へ

いろいろ試行錯誤しながらやってきていますが結構大変ですね。なかなか難しいです。だから思うような状況にはなかなかないですよ、未だに。じっくり時間をかけて僕の理想とする形にどんどん近づけていきたいとは思ってますけど、その理想とする形もだんだん少しずつ変わってはいます。最初はテーマパークみたいなのをイメージしてたんですけど、今はちょっと違うんです。それは、地域の人々がどう幸せになるかっていうことも考えながら活動しているので、少しずつ自分の考えも変わってきて、これをやりながら、どう地域の人たちに幸せになってもらうかという考え方も桜島ミュージアムの目的に加わりました。



（写真提供：桜島ミュージアム）

## 今、考えているのは「椿油」

今一番考えているのは、雇用も新しい雇用かどうかかわからないですけど、椿を活用して、新しい産業を作れないかなと思ってまして、藪椿なんです。結構、埋蔵量というか、生えてる量が多いんですね。でも油にあんまりしてないんですね。それはしづらっていうところもあるんですが活かせば相当量の油が取れるんじゃないかと思ってます。伊豆大島でもそうなんですけど、それだけで、生業にしている人ってあんまりいないので、でも、サイドビジネスくらいにはなるわけで、地域のおじいちゃんおばあちゃんが種を拾ってきたよ、みたいな感じでも可能性がある。それでいくらで買い取って、油に変えて、2次産業として、加工業があって、それをさらに販売する、3次産業があって、あるいは、それ全部を体験させる体験プログラムみたいなものがあるという具合に1次産業から3次産業までつなげたような形で、何か椿っていうのを桜島のひとつの産業にできたら、いろんな雇用も生まれるんじゃないか、お金も生まれるんじゃないかなとは思ってます。

## 地域の中で理解される難しさ

住民の方々がいい環境になるようにするためにっていうのは結構いろいろ大変だなあっていうのが、感触としてやっぱりあります。住民の意識のレベルがいろいろあって、今ここでやっていますから、近くのふるさと町内会の方とかよく来てくれるんですね。「同じ町内会の中でも、福島さんとこと一緒に今度びわ畑手入れしたい」って言ってきて、それで一緒になんとかしようと思うと反対する人は必ずいるんですよ。この間も「みかんの畑が荒れていだけだから、皆でちぎってよくしましょよ」って町内会の人が出て「福島さん一緒にやりましょよ」って、場所まで見に行っているやっただけで、結局最後はそこを持ってのおばあちゃんが、やっぱりよその人には触れられたくないっていう感じで、触らせなかったらどんどん腐っていくだけなんですけど。そんな状況があったりして。簡単にはいかないっていう感じですね。

同じ住民の中でもそれだけ反対派と同意派がいろいろいたりして、それはどこでも同じことだと思うんですけど、でも、これは少しずつ、変えていかなきゃならないし、いい例を「あれやってよかったな」って思ってもらえるものを少しでもやっていって「やったらよかったよ、意外に」っていう言葉が少しずつ出てくるような環境にしていかなければいけない。これは結構時間がかかるのかなと思ってます。



## 修学旅行への可能性と効果

観光の方に関しては、僕はある程度可能性があるんじゃないかなと思っていて、それは、これから体験型の観光というのは非常に重要になってくるといことなんです。修学旅行なんかも今、何を体験できるのかっていうことが非常にメインになってきているので、これからいろんな体験が出来るような、プログラムをたくさん開発して、今度はそれを住民の方にやっていただくことを考えてます。修学旅行であれば、何年後の何月何日ってほしい決まってるんですよ。そうすると、その日だけ空けておけばいいので、その日必ず空けなきゃいけない日が年に5回くらいあっても対応できると思うんですよ。そうすれば、地元の方が、自分たちの持っている仕事とか、産業とか農業でもなんでもそうなんですけど、そういったものを、自分たちの言葉で伝えながら、体験してもらうことが出来るんじゃないかなと思っているんです。そうすると地域の方々の活力というか、子供たちと接することで「なんか、がんばらなきゃ」と思ったりする効果もあるでしょうし。

## 最終的な目標は、訪れる人と住んでる人が楽しめる地域づくり

ちょっと抽象的な言い方で申し訳ないんですけど訪れる人と住んでる人が楽しめる地域っていうのが最終的な目標ですね。訪れる人っていうのは観光客に限りませんけども、たまたま来た人でもいいんですけども、そういった人たちが、桜島っていいなあ、面白かったなあ、みたいな。住んでみたいなって思う地域であって、住んでいる人にとってみたら、よその人がいっぱい来るし、自分の地域にいいものもいっぱいあるし、これを守っていきたいっていう、誇りと愛着を持ってですね、活力あるような形で住んでいけるような。そんな地域になればいいなと思ってます。それはどういう方法かっていうのは、今、いろんな方法で少しずつ考えているところで、どの方法がいいかはわからないですけど。その時に一番良いと思った方法をとりながら、目標に向かって動いていきたいなと思ってますけれど。

とにかく動き続けることだと思うんですね。それで、僕もいろいろなものが見えてきましたし、やっぱりやらないとわからない。頭の中で考えてこんな風になったら良いんじゃないかと思ってやってみたら、実は全然よくなかったということもよくあります。そういう意味では逆に、やらなきゃわからないし、こういう活動にお金をつけてもなかなか難しくって、やろう、こういうことやりましょ、って言ってやり始めても結果が何か、例えば計画書を書いても違う結果になることだってあるわけですよ。仕事としてはそういうやり方だけってこう難しいなっていう印象がありますが、試行錯誤ですね。常に。

さわやかに出迎えてくれた福島さん。理事長という肩書きはあるものの、何から何まで自分でやらなければいけないまだまだ成長中のNPO 桜島ミュージアム。

お話を伺い、印象的だったのは、福島さんの目のきれいさであった。必ずやってやるという覚悟も見える目であった。

さすがに学者なだけあって、状況判断は正確、しかも、未経験の部分に対しては、素直な姿勢で臨む。なかなかしづとそうなその雰囲気、桜島で長く続けてくれる意思が見えた。おそらく骨を埋める覚悟であろうと思った。

こういった事業へ挑戦する時に、一番大事なのは、しづとどこまで頑張れるかである。頑張りすぎると疲れてしまうので、あきらめることなく続けなければならない。結果、それは頑張っていることになり、いざ成功の花を咲かせる。

桜島に根をおろした若きリーダーに期待する。

聞き手 鈴木順一朗